



ソウシチョウ 富士市岩本山公園で撮影

厳冬期、郊外の林の中で、大きな声のさえずりが聞こえた。季節はずれなため頭の中が混乱しはじめる。まさかクロツグミが真冬に鳴くか？と双眼鏡で探してみるとソウシチョウであった。

スズメより少し小さいソウシチョウは中国南部からインドシナ半島北部にかけて生息し、もともと日本にいた鳥ではない。姿や鳴き声が可愛らしいので、飼育鳥として中国では昔から愛されていた。日本には江戸時代中期に輸入された。チメドリ科に属し、ウグイスとは近縁ではないが、糞は「ウグイスの糞」として美顔顔料に利用されたこともある。

この鳥が野生で見られるようになったのは1980年代の後半からで、筑波山周辺を発端として、県内では1990年以降に天城山や富士山の周辺で確認されるようになった。現在では県内のほぼ全域に勢力を伸ばしている。また、富士山周辺で実施している野鳥標識調査者によると、時期によっては最優先種がソウシチョウとのことであった。夏期にササ類の繁茂する常緑広葉樹林帯で繁殖し、冬期に漂鳥として標高の低い里山などに移動し、小さな群れをつくって市街地の公園や神社などに出没するようになってきた。

生息環境が笹藪であることから、在来のウグイスとの競合が危惧されるが、今のところソウシチョウが増えたからウグイスが減ったという明確な報告はない。しかし、ある地域の笹藪でソウシチョウの巣が高密度に増えると、ヘビやイタチ、カケスなどの捕食者が集まり、間接的にウグイスの巣も狙われる確立が高くなるという研究報告もある。

特定外来種に指定され、飼育や移動が制限されている。人によって持ち込まれたこの鳥も早い内に取り除いておかないと、本来の生態系は失われてしまうであろう。